

松藤民輔

Tamisuke Matsufuji

反転する
世界を
読む技術

ぼくの

勉強法
投資

超

松藤氏鞠

常州大学図書館
藏书章

反転する世界を読む技術
ぼくの超投資勉強法

講談社  新書
POCKET

松藤民輔

1955年、福岡県に生まれる。株式会社ジバン・ホールディングス代表取締役。明治大学卒業後、日興證券、メリルリンチ、ソロモン・ブラザーズを経て、日本のバブル崩壊を読み切り、投資の主役は「ペーパーマネー(株式、債券)」から「ゴールド(金現物)」の時代に移ると予見し、1995年に株式会社ジバンを設立。2005年にアメリカ・ネバダ州の金鉱山を買収。2010年1月、株式会社ジバン・ホールディングス(JASDAQ上場)代表取締役に就任、現在に至る。

著書には『アメリカ経済終わりの始まり』『世界バブル経済終わりの始まり』『無法バブルマネー終わりの始まり』(以上、講談社)などがある。

講談社+α新書 553-1 C



はんてん せ かい よ ちようとう し べんきようほう
反転する世界を読む技術 ぼくの超投資勉強法

まつふじ たみすけ
松藤民輔 ©Tamisuke Matsufuji 2011

2011年3月20日第1刷発行

発行者 鈴木 哲

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部(03)5395-3532

販売部(03)5395-5817

業務部(03)5395-3615

デザイン 鈴木成一デザイン室

カバー印刷 共同印刷株式会社

印刷 大日本印刷株式会社

製本 牧製本印刷株式会社

本文図版 朝日メディアインターナショナル株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料は小社負担にてお取り替えします。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは生活文化第三出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

Printed in Japan

ISBN978-4-06-272704-4

●目次

はじめに 3

第1章 一日26時間勉強する人だけが成功する

100年に一度の大チャンス	18	紙屑になったばかりの初投資	31
「リーマンショック」の正体	20	プロになるには1万時間学べ	33
「貯蓄志向」は矛盾だらけ	23	「ビッグピクチャー」を描こう	36
定年から始めて連戦連勝	25	投資憲法と投資のルール	39
「リベンジ」で投資のプロに	28	わからない会社には投資しない	41

第2章 これまでの「投資の常識」はすべて疑え！

- いったんすべての投資を手仕舞え 44 データやチャートより企業トップ 58
「分散投資」は金持ちの手法 46 地下2000メートルまで潜れ 63
儲けたいなら「集中投資」 49 「ゼロ金利」の国は経済力がある 65
割高で売り、割安で買い戻す 51 モラルは「儲かるかどうか」 67
上昇しても下落しても儲かる 53 専門家の予想は7〜8割外れる 70
すべては需要と供給のバランス 56 金利が下がると株価は下がる？ 74

第3章 見えないトレンドを見抜く「松藤流10種の透具」

- 一般的経営指標では絶対勝てない 80 松藤流「透具」③VIX 88
松藤流「透具」①ビッグピクチャー 83 松藤流「透具」④GSR 91
松藤流「透具」②BDI 86 松藤流「透具」⑤RGP 94

第4章 蛇口の水一滴から黄金を掘む方法

松藤流「透具」⑥BKX 98

松藤流「透具」⑦DX 100

松藤流「透具」⑧LIBOR 102

松藤流「透具」⑨石油株価指数 105

松藤流「透具」⑩カナダドル指数 108

投資とは、未来を透視すること 114

新聞からXデー銘柄を読み解く 115

季節性のケーススタディ 116

名探偵ホームズのイメージ力 118

海外情報の「裏」を読む 121

松藤流「日本経済新聞の読み方」 123

ヒット漫画で上昇株をモノにする 125

ノーベル経済学賞受賞者の大失敗 127

講演会、セミナーの活用法 130

1次情報で現場主義を実践する 132

見る、着る、触る、使う、買う 134

「投資勉強会」のすすめ 136

「投資日記」のすすめ 138

第5章 投資力を鍛える——3カ月間で3倍に殖やすゲーム

3カ月間の「投資ゲーム」 142

「投資の鉄則」を思い出そう 145

「売買予定リスト」を準備せよ 147

メガカンパニーの使い方 149

噂で買い、ニュースですべて売る 151

新興市場には手を出すな 153

「好きな会社」の株を買い 155

投資力を鍛える「3M」 158

「待つ」ことは最強の投資法 160

第6章 投資対象の選び方——戦略商品としての「金」

大局観・トレンド・タイミング 166

株は「伸びしろ」で選べ 167

投資は、NYダウ暴落後で十分 169

債券市場には手を出さない 170

実需ある商品はインフレで暴騰 172

やはり金投資がベスト 175

金・株価・商品の負の相関関係 178

恐慌時は金と金鉱山株しかない 179

金価格はまだまだ上がる？

182

「有事のドル」は賞味期限切れ

185

松藤流…成功と幸運を掴む30カ条

188

おわりに

196

投資力を鍛える19の参考文献

200

松藤氏鞠

反転する世界を読む技術
ぼくの超投資勉強法

講談社  新書
POSSIBILITY

はじめに

世界は、いまだ100年に一度の金融恐慌の真^まつ只中^{ただなか}にある。ドルもユーロもポンドもどうなるかわからない。

もちろん、円も人民元でもある。

こんな時代でも、投資の原理原則は変わらない。

「割安で買って割高で売る」

「割高で売って割安で買い戻す」

投資で勝つ鉄則はこれに尽きる。だがいま、売るか、買うか、これをどう実践するか、それが問題なのだ。

日興証券、メリルリンチ証券、ソロモン・ブラザーズ証券と、ぼくは人生の前半を「ペーパーマネー（株式投資、債券投資など）」の世界で勝ち抜くことに懸命だった。

ふり返ってみれば、ソロモン時代、日本における新しい金融商品は、たいていぼくが手が

けたものだ。1兆円もののデリバティブ（金融派生商品）にはじまって、ブラジル、メキシコなどのエマージング・ボンド（新興国債券、当時の利回り18〜21パーセント）、さらには近年ブームになったREIT（Real Estate Investment Trust：不動産投資信託）にしても、1990年ごろには大成建設とタイアップして仕掛けていた。REITについては日本での法律が間に合わなかったが、いずれも本邦初という商品ばかりだった。

おかげで年収2億円プレイヤーとして、国境と業界を超えて伝説が独り歩きするようになった。

ペーパーマネーから実物経済まで、連戦連勝の投資人生。日本のバブルの熱狂下でも、バブルに酔うことなく冷静でいられた。

こんなぼくが、はじめて個人的に株式投資をしたのは、メリルリンチ時代、28歳のときのことだった。

記念すべき初投資は、ビギナーズ・ラックならぬビギナーズ・アンラッキー！ みごとに失敗するのである。しかも、すつてんてんになってしまった。

相場に強い知人にすすめられるがままに、500万円分の株式を買ってみた。それが金曜

日のことである。忘れもしない、3日後の月曜日の朝。いきなり電話がかかってきた。

「3000万株の売り気配だ……」

株価はあれよあれよという間に、100円からわずか13円に！ しかもその会社は、会社更生法を適用。わずか3日間で、500万円が紙屑かみくずになってしまったのである。

不思議なことに、こういうときの間人は怒りすら忘れるものである。途方とほうに暮れたというか、思考停止になってしまったというか、いまとなってはその前後のことをよく覚えていない。

茫然自失ぼうぜんじしつとなる中、わずかに残った意識でこうも思った。

「もしかすると運がよかったのではないか？ 上場企業の会社更生法適用銘柄なんて、2年に一度出るか出ないかではないか。しかも、そんな株をたった3日しか持っていなかった。これはきつと、なにかのメッセーじにちがいない！」

その痛い失敗の後、日本では、バブル経済が本格的にスタートした。

1987年当時のNTT株（額面5万円）は、まさに「プラチナチケット」。人気が人気を呼んで、初値はつねはなんと160万円。2カ月後には、上場来最高値さいたかねの318万円をつける。

まさに空前絶後。
くうぜんぜつご

こんな熱狂的な株式市場のど真ん中にいても、ぼくは「失敗の教訓」を反芻しながら笑って眺めていられた。ながおかげで失敗しないで済んだ。いや、バブル崩壊を利用して、独立資金を貯め込むことさえできた。あのとき500万円は失ったが、その失敗の経験が結果的に、後に比較にならないほど大きなリターンをもたらしてくれることになったのだ。やはり、「ビギナーズ・ラック」だったのである。

連戦連勝の投資人生？ とんでもない、初しよ端ぽなからいきなりつまずいた男なのだ。最初に大失敗したから、負けないようになったのだ。

「金融恐慌が来る。金利も下落し、NYダウも日経平均株価も暴落する。上昇するのは金価格と金鉱山株だけである」

5年も前から現在の状況を確認して、『アメリカ経済終わりの始まり』（講談社、2006年11月刊）をはじめとする一連の著作やテレビ番組（「ガイアの夜明け」等）などで、ぼく流の「世界の読み方」を発表してきた。いまのところ、世界経済はまったくこの指摘どおりに推移している。

そして2011年2月、北アフリカから中東にかけて、革命の狼煙のろしが上がっている。チュニア、エジプトはすでに革命側が権力を握り、2月24日現在、リビア、バーレーンは時間の問題というところだ。

日本はこれらの国からは原油を輸入していないが、1バレル1100ドルを突破するとなれば話は変わってくる。幸い(?)円高であるために、じつは原油価格、食糧価格が高騰しても、耐性能力では日本(円)は世界一強い。原油価格が高値推移すれば、世界中でエコカー買い換えへと一気に進む可能性すらある。

オバマ大統領はまたも右顧左眄うごさへんしているが、オバマが注視しているのはサウジに飛び火とひするかどうか。ここに飛び火するようなら、なんだかんだと理由をつけてデモ隊に革命側を徹底的に弾圧する側に回るかもしれない。いま頃になってアメリカは、イスラム諸国に「民主革命」「民主主義体制」を輸出したいと考えているが、しょせん、ビジネス先行のご都合主義にすぎない。

「これからの英国は、1929年以来の生活水準の低迷期を迎える。問題は、それがどのくらい継続するかだ」

こうつぶやくのは英国を代表する某知識人である。もはや金融市場で膨ふくらませた金融機関

の対外借金の量と不動産市場の低迷、そして隣国アイルランドの問題は対岸の火ではなく、「英国病」の発作を待つだけである、という。ヨーロッパで比較的にいいと思われているドイツと比べれば、英国の質的悪化は回避できない。処方箋がない。市場に介入する各国政府の努力、その実りは株価とインフレ資産の上昇、その短期的延命措置にすぎない。

一方、アメリカは、低所得者層の低位20パーセントの市民のエンゲル係数とエネルギー消費が収入の60パーセントにのぼる。参考までに、米国物価指数はノンコアとコアという2種類で発表されるけれども、コアという物価指数を示す指標にはエネルギーと食料品価格は含まれていない。そのコア指数で2パーセント。ノンコアで3〜4パーセントの物価指数である。アメリカ政府は、労賃が上昇しなければインフレではないと考えているようだが、同時に低所得者の生活水準にはなんの関心も示していない。アメリカでは、いかに市民生活が追い込まれているかがわかる。

暴動の可能性は、なにも北アフリカや中東だけのことではない。競馬に喩えれば、インド本命、中国対抗、そしてアメリカ穴馬——といったところだろう。

2010年11月、6000億ドルにもなるQE2（量的金融緩和）の市場介入で、テクニカルで見ればこれ以上上昇しえないところまで原油が買われている。そのために原油価格

は上昇している。

「1バレル1100ドルを超えた（2011年2月23日）」と市場は大騒ぎしているけれども、原油の下落サインが点滅する一方、金には上昇サインが出ている。原油価格が100ドルを超えた同時期、金価格も再び1トロイオンス1400ドルを超えている。この金上昇が原油価格をはじめとした、その他資産（食糧価格も）の下落を惹起させる可能性が高い。

この不確実な時代を生き抜くには、猛烈な勉強をするしかない。あなた自身の生活を守り、あなたの大切な夢を実現するためのマネーを守り、そして殖やすためにも、猛烈な勉強を始めなければならない。

もはやこれまでの平時の投資法、平時の勉強法はまったく通用しない。なぜなら、世界最高峰のプロたちが全滅したからだ。

いままでの経済学や経営学すら知的崩壊をしてしまったのだ。環境が大きく変わるいまは、新しい投資法、勉強法が必要だ。

恐竜は、体が大きいから消えたのではない。環境の変化に適應できなかったから消えたのだ。つまり、いままでの常識や古いマントを捨て、異端の発想に変える瞬間がやってきたの